27 年度ご挨拶（2016 年 6 月）

「日本で最も損な大学」に奉職して

歯科心身医学分野

豊福　明

10 回目の春をむかえて

50 歳と言う節目の年齢を迎えた 2015 年、同世代の俳優、本木雅弘氏のインタビューを読みました。その中で「50 代の航海図」を問われた同氏は「折り返しにきているので、いろいろと散らかしてきた前半をどう片付けていくのか、それが人生後半の作業かなと。そのためには、時間の経過とともに、ときに劣化であり、ときに進化でもある自分を、客観的にとらえなければ。自分の性質とあらためて向き合いながら、そんなことをうっすら脳裏で考えていきたい」と語っておられました（GQ JAPAN, NO.150,p151)。ひとつひとつの言葉が身に沁みました。さらに「人生って積み重ねていくものだけど、同時に身軽にもしていくものでもあるのかな、と」。

若い頃は嫉妬からか正直好きになれないタイプでしたが、「おくりびと」で刮目し、「天空の蜂」の好演で完全にリスペクトに回ってしまいました。

同期の友人が母校の教授に就任する同慶が昨年、今年と続き、改めて本学に着任してからの 9 年間に思いを巡らせました。

あともう 15 年遺されていますが、そもそも定年までしがみつく気は毛頭ありません。他の追随を許さない治療成績を更新していくだけでなく、もっと良い治療法を求めて一人一人の患者さんの治療を工夫し、苦心し、楽しみながら、第三者の評価に耐え得る臨床データとしてまとめ、世に問いたいと考えています。その過程で、難しい治療も上手にできるし、良い研究もできる後継者を育てていきたいと野望を膨らませています。（上写真は中村廣一先生の勉強会で）

留学生受け入れ

2016 年 4 月から、ベトナムの Univ. of Medicine and Pharmacy Ho Chi Minh

City から博士課程の留学生を受け入れました。当科から発表した論文を読んで歯科心身医学を志してくれたそうです。日本の歯科界では心身医学がなかなか浸透しない現実にやっきになっていましたが、思わぬことで歯科心身医学も逆輸出の時代が始まりそうでワクワクしています。とはいえコミュニケーションに不安たっぷりでしたが、これも勉強。抄読会や毎日夕方の新患カンファも自動的に英語で行うことになり、若い先生たちと一緒に片言英語で四苦八苦しています。

以下、2015 年度の主なイベントをご紹介致します（恒例の１年遅れのご挨拶で申し訳ありません)。

第１２回老年研究顕原賞受賞

一般財団法人 山口老年総合研究所が、「老年」にかかわるさまざまな分野において山口県内で活動しているか、山口県出身で県外で活動している若手研究者の業績を表彰し、「老年学」研究の発達に寄与するための賞です。

50 歳未満が応募対象で、リミットぎりぎりのところ「口腔領域の不定愁訴に

関する心身医学的研究」というテーマで応募しましたら、大変光栄なことに選考して頂きました。

もうお一人の受賞者は熊本大学大学院 医学教育部循環器内科学分野の花谷信介先生でした。新進気鋭の研究発表を伺い、こちらもとても刺激を受けました。2015 年 4 月 23 日に講演と授賞式のため本当に久しぶりに下関に出張しました。敬愛する高杉晋作に思いを馳せながら、今後の研究の励みになりました。

（左より　頴原健理事長、豊福明、頴原嗣尚所長　同研究所 HP より拝借）

第 30 回日本歯科心身医学会主管

7 月 18､19 日に第 30 回めとなる日本歯科心身医学会を本学で開催しました。吉川達也助教が準備委員長として奮闘してくれて、小さな教室ですが医局員全員で頑張って準備しました。もちろん当分野のメインの学会です。恩師の都温彦教授が第 5 回大会を福岡大で主催したのが平成 2 年、丁度僕が歯科医師人生を歩み始めた年でした。下っ端で会場の追廻をしながら発表に耳を澄ませていた当時を思い出し、四半世紀の歯科心身医学と自分の歩みを振り返って感無量でした。

テーマは"from Brain to Dentistry"−中枢から見た歯科医学と題しました。臨床と研究のバランスを考えて、脳科学的な内容と臨床に沿った内容を盛り込みました。ベテランの叡智を伝承し、若手も元気に「こころも診れる歯科医師に」なれるようにと願いを込めました。

本学の学生さん（歯学科と口腔保健学科）も北海道大学の学生さんまで応援に駆けつけてくれて本当に助かりました。

初日の特別講演には前国立精神・神経センター歯科医長の中村廣一先生、いしい記念病院内科部長の長嶺敬彦先生、本学歯学科長・認知神経生物学教授の泰羅雅登先生をお招きして、今後の自由闊達な研究に繋がるお話を頂きました。

懇親会も随分盛り上がり、特に 2 次会は「若手の会」と称して学生さんと講師の先生方との交流の場を設けました。来年も続けて欲しい企画です。

翌日は、インプラント・審美領域の「本当の難症例とは何か？」と題して、山崎長郎先生、小宮山彌太郎先生、中村社綱先生の超豪華メンバーによるシンポジウムを組み、大御所方が珍しく苦戦されたケースも提示して頂き、好評を博しました。

さらにシンポジウム２「外科系各科の心身医療に学ぶ」を企画し、谷川整形外科クリニックの谷川浩隆先生、本学産婦人科の寺内公一先生、東京医療センター耳鼻咽喉科の五島史行先生にご登壇頂き、患者さんの接し方など非常に勉強になるお話を頂きました。

（左より五島先生、寺内先生、豊福、右奥は谷川先生。お三方の集合写真が撮れておらず、微妙な構図で大変申し訳ありません・・・）

午後からは 3 回目となる PIPC セミナーでした。過去最多の参加者を集め、M&D タワーの最上階で学生さんからベテランまで大変楽しく学べました。

実は本学は、大学の「格」と入試の難易度が逆転している「日本で最も損な大学」と呼ばれているそうです（週刊ダイヤモンド 2016　6/18　p42）。

その中でも今回お手伝いしてくれた学生さんたちは、歯学部人気が底付きした時期に入学してくれた子たちです。日本一優秀な彼らに心無い週刊誌の中傷記事なんか吹き飛ばす大活躍をして欲しいと心底願っています。

とはいえ、世間（経済界？）の評判はそうなのでしょう。個人的には、この記事を読んで非常に燃えてしまいました。というのは、これまでずっと不利な条件下で「格上」とされている連中が真似できない仕事をする、ということを身上としてきました。ところが本学に着任して以来、どうも居心地が悪い思いをしてきました。自分なりに良い仕事をしたつもりでも「医科歯科だから、それくらい当たり前」と言われてしまうのです。拮抗するライバルがずっと不在というのもある意味しんどいことでした。けど、実は「日本で最も損な大学」だったのかぁ！と急にモチベーションが高まりました。臨床と研究、そして次世代の育成。「あの時、こんなこと書かれていた」と 10 年後には後進たちと笑い飛ばせるように頑張りたいと固く誓いました。

ご褒美

ひょんなご縁で敬愛する大先輩から約 30 年前のバイクを譲り受けました。25 年前に自らの愛機としていた車種です。福岡の某ショップでレストアを受け、見事に復活。学会終了後の夏休みに自分にご褒美と称して、9 年ぶりに早朝の三

瀬峠や雷山林道を走り回りました。山特有の涼しさとにおい、木漏れ日、つづら折りの道・・・何もかもみな懐かしく、おぼろげな記憶に涙ぐみながら水平対向エンジンの鼓動とパラレバーの乗り心地を堪能しました。

第７回耳鼻咽喉科心身医学研究会

東京医療センター耳鼻咽喉科の五島先生のお取り計らいで、9 月 26 日慶應義塾大学病院で、耳鼻科の先生方を前に「歯科領域の心身医療」という題で話させて頂きました。口腔がんなどの診療領域の問題で同科とはいろいろバトルがありがちなのですが、心身症領域だと「いかに患者さんに寄り添うか」で「同志」になれます。同科では「めまい・耳鳴り」が大問題だそうですが、近接領域だけあって問題意識が非常に似ています。会の先生方の”患者さんの苦痛を宙に浮かせない”という診療姿勢に非常に感銘を受けました。耳鼻科医の中でも心身医学を志す先生はまだまだ少数派だそうです。大々的にとはいかないでしょうが、こういうコラボが今後もどんどん深まると嬉しいです。

長嶺先生を囲んで

12 月 18 日に、いしい記念病院内科の長嶺先生をお招きして、研究指導とドパミンを切り口にした脳機能のお話をして頂きました。幅広い話題から現在進行中の研究にも多大なヒントを頂き、脳がずいぶん活性化されました。ちょっと時間が足りませんでしたので、またお願いする予定です。懇親会は忘年会も

兼ねて、美味しい沖縄料理を楽しく知的な会話とともにいただきました。

「正直、親切、愉快」

「心身医学」を通して、内科、耳鼻科、整形外科、耳鼻咽喉科、産婦人科、精神科、心療内科の先生方ととおつき合いが広がり、深まって行くことが非常に楽しく嬉しいと思います。

本学の学生さんや若い先生たちにも、一人の患者さんをいろんな専門の先生方と抱えていく連携医療の醍醐味を味わってもらえたらと願っています。本学歯学部で決定的に欠落しているのが「地域医療」「医療連携」の概念です。地域包括ケア構想を引き合いに出すまでもなく、もはや「歯医者は歯だけ」では患者さんを診れやしない時代です。蛸壺に引きこもって茹で上がってる場合ではありません。一方で、若い先生たちも医療連携の中でも埋没することなく歯科の専門性を発揮できる人材に育って欲しいものです。医科に伍する歯科を。そのための「自由闊達にして愉快」な教育環境。恩師が実現したかったのは、そういう場所だったのではないかという思いを今さらながら強くしています。「日本で最も損な大学」と歯科界の復権には、内田樹先生の言う「正直、親切、愉快」が実に大切だと考えています。

（2016 年 6 月 21 日記）